

# ぶらぐり

本書は福岡県稲作経営者協議会の編になるものである。本協議会は二〇〇〇年に設立十五周年を迎えるに至ったが、「低落は止まるところを知らない」米価と、その大きな要因であると「直感」されるミニマム・アクセス米の中のSBS（売買同時入札）の輸入先がアメリカから中国に急激なシフトをみせていること、またSBS

米の二割前後が福岡県で販売されていること等を背景に、同年三月にシンポジウム「福岡県の稲作経営を問う」を開催し、七月には中国・黒龍江省ジャポ二万米産地視察」を実施した。この一連の記念行事を準備・実施する過程での黒龍江省のジャポ二万米輸出戦略にかかる研究の成果と、現地視察を踏まえての座談会によつて本書は構成されている。

生産現場の詳細な実態分析がなされているところに本書の最大の特徴があり、中国のWTO加盟によつて日本農業はどのような影響を受けるのか、という問題意識で全体が貫かれている。ここで指摘されている重要なポイントは以下のとおりである。

第一に、九〇年代に入つて黒龍江省等の水稻作付面積が急増してきた理由は、広大な土地を有していること、国家買付け等の政策支援の存在とあわせて、日本からの技術協力、「平成コメ騒動」の発生など、日本の事情と大きな因果関係を有していること。

## 『中国黒龍江省のコメ輸出戦略』

### 中国のWTO加盟のもとで

福岡県稲作経営者協議会 編  
村田 武 監修 (家の光協会)

第二に、水稲面積急増は大量の過剰在庫発生と同時に大幅な価格下落をもたらしており、これ以上の稲作規模の拡大意欲はうかがえなかつた」としていること。

第三に、「農業生産環境の保全の意味を含めて、全国で開拓が禁止」されるとともに、緑色食品を含めて「農墾総局は傘下の国有農場に『売れるコメづくり』を躍起になつて奨励」していること。

第四に、中国の食糧基地としての役割が期待される黒龍江省は寒冷・乾燥の地域で、「長期的には、飼料作物、油糧種子等を移出するのではなく、耕種と畜産の組み合わせにより、できるだけ生産物の加工度を上げ、ていくなど、畜産を主体とする農法が主になると考えられる」としていること。

第五に、WTO加盟によつて中国農業は市場開放の脅威にさらされることになり、特にこれまでの国家貿易による輸入制限を撤廃して関税割当制度に移行する主要穀物

については、その半ばが民間貿易にゆだねられた場合には輸入が実行される可能性は高く、さらに国際価格による輸入が国内価格の足を引く張ることになるとしていること。

第六に、こうした情勢から構造調整を余儀なくされる中国農業は、食肉、果実、花卉等の国際競争力のある農畜産物へと生産をシフトさせ、「その輸出先は、何よりもわが国や韓国など近隣アジア諸国が重視される」としていること。

いずれも鋭い指摘ばかりで異論はないが、次の二点に留意が必要であろう。

第一は中国の農産物、特に穀物については一方的な輸入、輸出に偏るのではなく、輸出と輸入の両建てになるものと考えられ、わが国にとつては恒常的に輸入圧力は続くともみらるべきであること。

第二が、国際的な品質評価を得るために緑色食品を輸出戦略の基本に据える、としているが、中国国民の所得向上にともなつて環境・安全性に対する関心は急速に高まつてきており、緑色食品、環境に配慮した「生態農業」への取り組みは中国農業自体の「構造変化」でもあつて考えられること。

ともあれ、本書は隣国・大国である中国との農業・貿易問題を考えしていくにあつて必読の良書である。

(二〇〇一年六月、一九六頁、一六〇〇円)

( 蔦谷栄一 )